

10. IgA 腎症における ICAM-1 の発現

浅野美和子・湯村和子・大関弘之・内田啓子・
川嶋 朗・新田孝作・二瓶 宏 (第四内科)

座長 湯村和子 (第四内科)

11. RT-PCR 法によるヒト T 細胞抗原レセプター-V β の解析

加藤秀人・八木淳二・今西健一・内山竹彦 (微生物学免疫学)

12. EB ウイルスのウサギ眼感染実験における抗体の推移

亀井裕子・宮永嘉隆・渡理英二¹・高橋めぐみ¹
(第二病院眼科, 日医大微生物免疫¹)

13. ミエリン塩基性蛋白の免疫特異部位について

太田宏平・清水優子・江島光彦・田中久恵・
植田美加・大橋高志・丸山勝一 (神経内科)

1. 手術侵襲の細胞性免疫能に与える影響に関する検討

(第二病院外科)

小川 健治・平井 雅倫・若杉 慎司・
三浦 一浩・勝部 隆男・矢川 裕一・
梶原 哲郎

癌の外科治療を行うとき、手術侵襲による細胞性免疫能の低下を抑えることは極めて重要であるが、その病態や発生機序の詳細は不明である。そこで、胃癌、結腸癌患者15例の術前、術中、術後にわたって細胞性免疫能、内分泌系ホルモン、急性相反応物質などを測定した。その成績にもとづいて病態や発生機序を検討し、以下の結論をえた。

1. 手術侵襲によって、担癌患者の細胞性免疫能は確実に低下する。

2. その免疫学的病態は、末梢血リンパ球における helper-inducer T, cytotoxic T, NK cell の比率の低下, suppressor T cell の比率の上昇などが主体をなす。

3. 細胞性免疫能低下の発生機序には、カテコールアミン、コルチゾールなど内分泌系ホルモンの増加、IL-6, IAP など急性相反応物質の増加が関与すると考えられる。

2. ATG-F 抗体の特異性と拒絶反応抑制に関する免疫学的検討

(腎臓病総合医療センター)

早坂勇太郎・高橋 公太・太田 和夫

ステロイド抵抗性の拒絶反応に高い治療成績を示した OKT 3 は、ヒトに異種抗原性を示すマウス IgG であり、また T 細胞に対する強いマイトジェン作用により抗 OKT 3-2 次抗体が産生されやすく、その後の治療

効果を著しく減少させ、投与期間、回数、再投与、等が限られてしまう。一方、ATG-F はウサギ由来の抗ヒトリンパ球ポリクローナル抗体であり、OKT 3 投与後のステロイド抵抗性拒絶反応に対する rescue therapy の期待も大きく、抗体特異性や OKT 3 との交叉応性を検討、若干の知見をえたので報告する。ATG-F 特異抗体は FITC-標識モノクローナル抗体に対する交叉阻害試験にて検討した結果、CD 2をはじめ、 α/β -TcR 定常域、CD 4, CD 7, CD 45, CD 71 (TfR), CD 11a (LFA-1), CD 54 (ICAM-1), 等の接着補助分子を中心とした特異抗体が検出された。この結果、CTL キラー細胞の標的細胞に対する結合阻害作用による ATG-F の治療効果が推察された。また抗 ATG-F-2 次抗体は OKT 3 の反応に対する影響を示さなかった。

3. 慢性関節リウマチ (RA) 罹患関節近傍骨髓における granulocyte/macrophage colony-forming units (CFU-GM) の検出

(膠原病リウマチ痛風センター)

小竹 茂・佐藤 和人・
金 強中・柏崎 禎夫

RA では滑膜細胞の産生するサイトカインおよび単球、マクロファージが病態形成に関与している。RA の病態における造血細胞の役割を明らかにするため罹患関節付近の骨髓 CFU-GM, CFU-F を定量し滑膜培養上清のサイトカイン濃度との関連を検討した。RA 21 例、変形性関節症 (OA) 10 例、外傷 2 例を対象とし人工関節置換術施行時に採取した PB および BM より単核球を分離、rhGM-CSF の存在下に培養しコロニーを算定した。同時に滑膜組織培養上清の IL-1 β , IL-6, GM-CSF を ELISA で測定した。滑膜培養上清中の IL-1 β , IL-6, GM-CSF 濃度は RA と OA はほぼ同